

# 妙安寺だより 344

テレフォン法話 092-751-6084 (毎週月曜日に話が変わります)

四月の花といえば桜。桜の花というと古来から歌にまれ、日本人の美意識に深く結びついています。

平安貴族たちは、桜を重んじ、花見といえば梅の花よりも桜の花を指すようになりました。

農耕民族であった日本人は、農作の象徴として、桜を重要視していました。

桜という名前も「さ」は田の神の意味で、「くら」はその寄りつくところという意味があります。

すなわち、「さくら」は田の神の出現を意味しているのです。桜の花ばかりではなく、暦のなかった時代には、自然の草木や動物などが暦の役割を果たしていました。

そのなかでも桜は、日本人にとって特別な花だったのです。

桜の花の下で飲食するのは、古代の信仰行事であった神と人との共同飲食の名残といえます。

## シリーズ 言葉とことわざ

### さまざまな『見る』

自分の足元を見るのはいいけれど、人の足元を見る（人の弱み）のはいけません。

大目に見るのはいいけれど、下目に見る（相手を見下げる）のはいけません。

正直で馬鹿を見るのはいいけれど、喧嘩で血を見るのはいけません。

長い目で見るのはいいけれど、白い目で見たらいけません。

真面目な人はいつかきつと日の目を見るが、ずるがしこい人は、最後に必ず泣きを見ることになる。

人の面倒を見る人は、人からぎ見られ、人を目八分に見る（見下す）人は、自分が馬鹿を見ることになる。

### 腹も身の内

「」をといい、善心を害するの代表にげられています。

動物は「むさぼる」ことをできないと言われていますが、不思議に思うのは、野性の動物には『肥満』は見られないのに、人間には何故それがあるのかということです。

それは人間の方が「むさぼる」からではないでしょうか。人間の頭脳は極めて優れているはずなのに、何故、食べ過ぎると腹に負担をかけること、「腹も身の内」ということがわからないのか。

要するに人間は、「さ」からも脱していないようです。